

生徒が「気付き」を得るために 内面を深める過程をくり返す

進路指導で生徒にとことん「考えさせる」ことには、どのような意味があるのか。生徒が考えるために、教師はどのような支援が出来るのか。長年、進路指導に携わってきた3人の先生方に聞いた。

「社会で生き抜いていく力が求められている」

編集部

社会環境が大きく変化する中で、以前と比べて生徒に変化を感じる部分がありますか。

鈴木

最近の生徒は全般的に幼く、受け身になっていっているように感じます。しかし、子どもの能力が落ちているとか、意識が下がっているという事ではなく、成長のスピードが少し遅くなっているだけだと思うのです。子どもの本質は何も変わっていません。子どもが潜在的に持つ力を引き出すために、我々教師が以前よりもっと深くかわることが必要ではないでしょうか。

牧島

私もそう思います。むしろ、教師が表面的なところで生徒を見て、「今の生徒は考える力がない」と枠にはめているのではないのでしょうか。私は、県を代表する進学校にも、学力的に厳しい学校にも勤めてきました。その経験からいえば、どの学校でも生徒の本質に違いはありません。生徒は皆、考える力、学ぶに向かう姿勢、そして「より良く生きたい」という思いを潜在的に持っています。大切なのは、我々教師が生徒の可能性を信じ、生徒が持っている力をいかに引き出すかということだと思います。

藤崎

今の生徒は、努力した分だけ未来は良くなるという、我々が高度

成長時代に抱いたような希望を持ちにくい時代に身を置いています。「努力⇨幸福」ではなく、「相関がある」程度の認識かもしれません。しかも大学全入時代となり、頑張らなくても大学に入れます。そのため、「自分の志」のために無理をする心境になりにくいのだと感じます。

一方で、企業が新卒者を見る目は年々厳しくなっています。就職しても、会社がその先どうなるかは分かりません。ですから、「より良く生きたい」という気持ちを持ち、将来を考えて行動し続ける、いわば社会で生き抜いていく力を付けることが大切だと思います。我々は、そうした生きる姿勢や力を付けるための一



栃木県・私立文星芸術大学附属高校進学統括部長
牧島勝利 Makishima Katsutoshi
教職歴48年。同校に赴任して10年目。担当教科は生物。県立高校の教師を38年間勤め、定年後、同校に赴任。英進科長として、学習指導・進路指導の両面から進学実績の向上に努める。県立高校時代は、栃木県立宇都宮高校教頭、栃木県立黒磯高校校長などを歴任。

つの場である進路学習の重要性をもっと認識すべきかもしれません。

自分の可能性を広げるために 何が必要か気付かせる

編集部

先生方は進路学習の意義はどこにあるとお考えでしょうか。

鈴木 私は三重県立川越高校で「総合的な学習の時間（以下、総合学習）」の導入に携わった時から、生徒の志を育て「世のため、人のため」になれる人材を育てることを目標に据えてきました。社会とのかかわりの中で自分の生き方を考えさせるこ

三重県立神戸高校教頭

鈴木達哉

Suzuki Tatsuya

教職歴29年。同校に赴任して1年目。担当教科は国語。三重県立川越高校で学校改革に携わり、進路指導主事として、進学実績向上を牽引する。その後、三重県立津高校進路指導主事を経て現職。



とで生徒の自立を促し、学びへのモチベーションを高められるのではなにかと考えたからです。

進路学習の一番の目的は、生徒に社会で生きていく力を獲得させること、つまり「自立させること」だと考えています。そのために必要なのは、生徒自身が自分の進路についてとことん考える経験ではないでしょうか。節目となる進路選択の時に、たとえ結論が出なくても、悩んで考え抜いた経験が、生徒を大きく成長させるのだと思います。

藤崎 私も進路学習を通じて生徒が自分の頭で考えることは、非常に大切だと思います。生徒にとことん考え抜かせた上で、教師は辛抱強く待つ。進路学習は生徒が独り立ちするための「期」を「待」つ教育、すなわち「期待」の教育だといえます。生徒が考えることで、教師の指導が浸透しやすくなる側面もあります。生徒一人ひとりの個性や能力、進路は違いますが、我々は皆にとつて大切だと思うことを生徒全体に向けて話します。我々が投げかける言

鹿児島県立川内高校教頭

藤崎恭一

Fujisaki Kyoichi

教職歴27年。同校に赴任して2年目。担当教科は数学。鹿児島県立甲南高校では、進路指導主任として「K-1プロジェクト」（総合的な学習の時間の確立、進路学習の推進などを通して、進学実績の向上に努める）



葉や指導を自分のものにしていくには、生徒それぞれが自分の立場に当てはめて考えなければなりません。生徒に考えさせる習慣を付けることで、我々の発信の受け止められ方も変わってくるのではないかと思います。

牧島 教師や生徒の中には、進路学習の目的は「将来の目標を見つけること」だと考えている人がいます。もちろんそれは大切ですが、目標探しばかりを強調すると、「自分は何

りたい職業がない」ということを勉強しない理由にする生徒が出てきます。しかし、自分の適性なんてそう簡単には見つかりません。見つからないのなら、なおさらどのような進路にも対応できるよう、どの教科もまんべんなく勉強することで自分の可能性を広げなくてはならない。そこに気付かせるのも進路学習の役割だと思っています。

進路学習で大切なのは、活動を通して、生徒に幅広い選択肢を示すことであり、自分の可能性に気付かせることです。そうすれば、夢を持っている生徒は、その実現のために今勉強しなければならぬことに気付くでしょう。具体的な夢を描けない生徒も、勉強することが将来の可能性を広げるということに気付くかも知れません。進路指導はまさに「気付き」の教育だと思っています。

書くことが自分を見つめ 進路を考えることにつながる

編集部

進路学習では生徒に「考えさせる」ことが重要というお話でし

「書くこと」は、自分自身と向き合うこと

・牧島勝利先生

だが、それにはどのような方法が考えられますか。

鈴木 生徒が自分で「考える」ためには、書いたり話したりする機会を出来るだけ多く設ければ良いと思います。人間は言葉を通じてしか考えることは出来ません。考える力を高めるには、自分の考えを言葉にすることが大切なことです。

「読み書きにはセンスが必要だ」という人がよくいますが、国語教師の立場から言うと、読み書きは訓練次第で伸ばすことが出来るスキルです。書き方を身に付けられれば、書くことが楽になり、考えることも楽になります。そのスキルを身に付け、更に読む・聞くという受信する力を高めることで、考えを膨らませられると思います。

牧島 私も「書くこと」を進路指導の最重要課題として位置付けています。「自分はどのような人間なのか」「これからどのように生きていきたいのか」。書くことを通じて自分と向

き合ううちに、真剣に自分の将来について考えるようになるのです。なぜ勉強しなければならないのか悩んでいた生徒も、自分の可能性を広げるために必要なのだということに気がきます。書くことは「考えること」そのものだと言えるでしょう。

「生徒の書いたものには手を入れないといけない」とか、「いい加減に書いたものであれば、そのままにはしておけない」という意識から、書かせる指導に負担を感じる先生もいるかもしれません。

私の指導では毎回のように400字のレポートを書かせます。字が少しくらい汚くても、多少誤字があっても構いません。とにかく規定の分量を書かせます。添削はしません。書き方の訓練ではなく、あくまで自分と向き合い、自分をさらけ出すことが狙いだからです。生徒には「書けないのは、考えていないからだ」と伝えます。逆に、書けば自分を見つめられるようになることも伝え

ます。自分が成長しているという実感さえあれば、生徒は自ずと書くようになり、進路についても深く考えるようになります。

鈴木 教師がテーマを示し、原稿用紙を渡すだけでは、書けない生徒も大勢います。書かせる指導では、生徒が自分で考えられるように導いていく教師のコーチングスキルが非常に重要です。

例えば、「勉強にやる気が出ない」と書いた生徒に対して、「どうしてやる気が出ないの」「好きなことには興味を持てるよね」など、生徒が自分で考えられるように教師がさりげなく誘導していきます。この時のポイントは、教師が話すのではなく、生徒自身に語らせるということです。教師の「問い掛け、引き出す力」と言い換えても良いかもしれません。生徒の可能性は無限にあるということを前提に、生徒に考えさせるコーチングのスキルを教師が身に付けることも、進路学習の成否を左右する鍵になると思います。

教師は生徒を見守り 機を逃さずに評価する

編集部 進路学習を進める上で、教師のかかわり方についてお聞かせください。

藤崎 教師が一方的に教え込むスタイルだけでは、必ずしも生徒の意欲を育てることはなりません。学校が進路学習のプログラムをしっかり組み、全体をコントロールする一方、肝心な場面では生徒自身の主体性や判断に委ねる場面をつくる。少々不安でも、教師がぐっとこらえて見守ることで、生徒に自分で考えようとする姿勢が身に付くようになると考えています。

鈴木 面談でも、多くの場合、教師のティーチングになりがちだと思います。「このレベルの生徒にはこのくらいの大学だろう」という思い込みが先行し、つい押しつけがましい指導になることがあります。教師が

「志」のために「無理」が出来る生徒を育てたい

・藤崎恭一先生

一方的に話すのではなく、生徒が話すように仕向け、話してきたら「なぜそう思うの」と粘り強く問い掛けながら、生徒から言葉を引き出すことが、生徒が自分で考え、内面を深めることにつながるのです。

藤崎 進路学習では、生徒に自分の成長を実感させることも大切です。教科学習と違い、出来たものが不完全であっても、努力に対して生徒を評価できるのが進路指導の良さです。取り組みを通して、生徒に何らかの学びがあれば、大変意義深いものになります。進路学習のメリットを生かして、生徒を前向きな気持ちにさせる工夫が必要です。

進路学習の意義を熱く語れる教師はいるか

編集部 お話しいただいたような指導を行うために、学校組織には何

求められているのでしょうか。

鈴木 勤務校のある三重県の場合、先進校の進路学習のノウハウが他校にも共有されていて、多くの学校でカリキュラムに組み込まれています。しかし、取り組みの形は整っていないものの、理念や目的を校内でしっかり共有できていない場合もあるようです。「魂」がないまま形だけの取り組みとなると、前年度の内容の踏襲となりがちです。そのため、活動の中心を担っていた教師や情熱を持った教師が異動してしまった途端に、期待していた効果が得られなくなることが起こっているようです。

牧島 確かに、取り組みを始めてから年月が経つと、前年度の踏襲になりがちです。私は、進路学習を効果的なものにするには、二つの条件が必要だと思っています。一つは、進路学

生徒自らに語らせることで「考え」を深める

鈴木達哉先生

習を行うための総合学習やLHRが、不定期で一時的な取り組みではなく、カリキュラムに組み込まれていること。もう一つは、教師が進路学習の意義を明確に理解することです。進路学習は「生き方」を考える学習です。つまり、教師の人生観も大きくかわります。いろいろな価値観がある中で、これを進めていく



には、生徒にその意義を熱く語れる教師が絶対に必要なと思います。**藤崎** 進路学習を維持・発展させる苦労は確かにあります。学校の実態を熟知した教師集団がつくり上げたプログラムを、異動してきたばかりの教師が同じように行うのは大変です。時間の経過と共に、制度疲労が起ることもあります。取り組みを効果があるように継続するポイントは、自分たちが実施して感じた「違和感」を2、3年のスパンで話し合い、今、目の前の生徒に合った形に修正することです。こうすることで、「意義を語れる」先生が後に続いていくのではないかと思います。

その際、生徒から見ても魅力的なプログラムであることも重要です。生徒から「調べよう」「深めよう」という意欲を引き出し、自ら学ぶことの楽しさを味わわせる。ただし、我々教師が出来るのはそこまでです。高校の進路学習では、社会に出た時に自ら学び、工夫して生き抜いていこうとする姿勢の土台をつくることに力を注ぐべきだと思います。